

## 「善き未来をひらく科学技術」選考講評

選考委員長 大垣 眞一郎

「善き未来をひらく科学技術」は、今回が2回目の募集、選考となりました。未来の社会はどうあるべきかという構想と、研究者個人の独創の発意による新しい分野をひらく研究の提案、この2つを同時に求めるという難しい課題に今年も多くの方から応募がありました。

善き未来をひらくという幅広い概念の設定が、自由で独創的な研究の提案を生み出すであろう、という期待にたがわず、善き未来につながる様々な視点からの提案が集まったと感じています。応募案件すべてに触れることはできませんので、昨年と今年の2年間に研究助成を受けた提案を振り返って、その多様な広がりをご紹介します。

昨年は、「人の問題解決能力につながる非認知能力」、「環境問題と人の健康に配慮した害虫防除戦略」、「材料開発戦略を一変させる人工元素づくり」でした。切り口も科学技術の領域としても異なる3つの提案を採択しました。今年採択した4つの提案は、それぞれ「生命科学の根源的課題である転写機構」、「次世代個体への健康影響に関わるエピゲノム情報」、「遺伝子資源を未来に残す動物遺伝子の常温長期保存」、「感染症対策技術としてのワクチン製造プラットフォーム」を主題とした提案です。これらもまた、それぞれ異なる視点から善き未来を構想した研究であり、昨年の3件を合わせると、7つの善き未来が描き出されたことになります。

いずれの研究も、未来の人類の生活の質を高めることに大きく貢献し、未来の善き社会を作る重要な基盤になると考えられます。また、基礎から応用までの多様な分野において、具体的で独創的な研究戦略が示されており、科学技術の革新を期待できます。

残念ながら採択には至らなかった中にも、魅力的な提案に出会うことができました。“こういう未来へのアプローチの仕方もあるのか”と感じさせる課題を設定し、果敢に挑戦しようとしている提案もありました。選考委員にとっても新鮮な刺激に溢れている提案でした。このような提案は、相対的に若い研究者の方々から出てきているように感じられ、今後より洗練された形での研究提案となるものと大いに期待しています。

ここ1年以上にわたる新型コロナウイルス禍のため、採択された研究者同士、あるいは選考委員や財団関係者が相互に対面で交流することはとても難しい状況でした。これからは感染防止に配慮した環境の下で議論できる機会も増えてくるでしょう。過去2年間で採択された7つの研究に携わる皆さんと、さらに今後加わるであろう新しい仲間を含めて、相互に刺激し合いながら、善き未来をひらく科学技術を醸成することができます。大いに楽しみです。皆様の研究のますますのご発展を期待します。